

## 試 訳

フィヒテ著 『フリードリヒ・ニコライの  
生涯と奇妙な意見』（1801 年）（2）

勝 西 良 典

## 解題

以下に訳出するのは、ヨーハン・ゴットリープ・フィヒテ著、A・W・シュレーゲル編『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見。前世紀の文学史ならびに幕開けしたばかりの今世紀の教育学に関する論考』（*Friedrich Nicolai's Leben und Sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Litterargeschichte des Vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts*, 1801）の第2章から第5章である。底本には、アカデミー版全集（J. G. Fichte — *Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Reihe I, Bd. 7, hrsg. von Hans Gliwitzky und Reinhard Lauth, Stuttgart 1988. 以降、GA I/7 と略記）所収のテキストを用いた。訳文中の〔 〕は訳者による補足であり、訳文の欄外の数字はこの版のおおよその頁付けを示している。また、原注は章末に、訳注は脚注として示している。これに先立つ部分の訳ともう少し詳しい解題については、『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第17号（2018年3月、101-116頁<sup>1</sup>）に掲載されている。

---

<sup>1</sup> この訳をダウンロードできるサイトのページのURLは以下の通り（2019年3月9日現在）。  
[https://fujijoshi.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1642&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://fujijoshi.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1642&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

## 訳文

### 376 第2章 我らが主人公がこの奇妙な最高原則にこのようにして至ったであろうと考えられる道筋

原因が同じなら、どこでも同じ結果がもたらされる。さて、我らが主人公の外部にある状況は、私たちの考えでは、彼のうちにある上述の奇妙な意見がもとで生じているのであるが、他の人間の場合にも見られるものであり、そうした人たちにあっても、同一の成果をある程度収めている。しかしながら、これほどまでにかの原理を堅持し、これほど全面的で一貫しており、またこれほど広く私たちに知られている者は、我らが主人公の他にはいない。これこそまさに彼をして、彼のような類の人間の典型として後世に語り継がれる名誉に浴させたもののなのだ。というようなわけで、彼の場合、かの原理が展開することによって導かれるあの外的状況に、彼の本性であるところの、外的状況に対する優れた内的感受性がさらに付け加わっているに相違ないのである。人類にとって非常に幸運なことに、我らが主人公自体は、——クロプシュトック<sup>訳注1</sup>が『ヘルマンの戦い<sup>訳注2</sup>』のまえがきとして添えた献呈の辞においてそうしたように、これから起こることや、クロプシュトックによって起こりうると予言されていたことよりもはるかに確実に起こるであろうことを、すでに起こったこととして告知することが私に許されないなどということとはなかろうということですが——、彼自体は、1803年に彼の最後の敵である超越論的観念論が姿を消し、『ドイツ百科叢書』が再びきちんと発行され始めた後<sup>原注(1)</sup> <sup>訳注3</sup>、輝かしい栄光によって勝ち取った暇

訳注1 フリードリヒ・ゴトリープ・クロプシュトック (Friedrich Gottlieb Klopstock, 1724-1803) : ドイツの詩人。代表作は、「救世主」(Der Messias, 1748-1773), 「チューリヒ湖」(Der Zürichersee, 1750), 「春祭り」(Die Frühlingsfeier, 1759) など。

訳注2 『ヘルマンの戦い。戯曲のための愛国詩』(Hermanns Schlacht. Ein Bardiet für die Schaubühne, Hamburg und Bremen 1769) の献辞「皇帝陛下殿」を参照。

訳注3 ニコライは1801年に再び『新ドイツ百科叢書』(Neue allgemeine deutsche Bibliothek. 以降, NADB と略記) の編集者になった。Vgl. GA I/7, S.

を費やして、彼の勉学修業時代の物語<sup>訳注4</sup>を幼少期はおろかゆりかごまで振り返って書いた。このようにしてそうした名声をもたらず彼の著作群を完結し、魂を天に返した。3巻からなるこの古典的著作の第1巻において<sup>訳注5</sup>読者に知らされるのは、この作家の産声が文壇をどのように震撼させ、文壇のあらゆる罪人をどのようにおののかせたのかということ、そして、すでに彼のおむつが、誕生以来不朽の名言のかたちをとって発し続け、醸し出してきた気の利いたしゃれっ気の香りを漂わせ、その結果、周囲の者がみな不思議に思い、「いったい、この子はどんな人になるのだろうか<sup>訳注6</sup>」と言ったということである。そして続巻において読者が知りうるのは、自分自身にかんする記憶が定着してからというもの、——しかも彼はごく幼い年端も行かない時期まで思い出せるのである——、生き生きとした空想の力を通じて衝動を覚え、理解力を身に着けることにより、彼が仲間の子供たちや同年の子供たちの誰よりも遙かに優れているとどれほど感じているかということであり、その結果、彼が両親と教師から真の神童だと喧伝されたということなのである。しかしながら、こうしたことにかんする主人公の詳細で優美な記述自体に当たってみることは読者に委ねよう。私たちは、ここでもこれからも、有名な著者が何を見過ごしているのか、また、その時代の他の文化遺産<sup>訳注7</sup>だけから汲み取ることができるものは何かという問いに限定して取り組む。

私はここで、国民が学術語での執筆から現在用いられている言語での執筆に移行すれば根本的な真の学識の退廃期が必然的に到来するかどうか

### 377 Anm. 6.

<sup>訳注 4</sup> フリードリヒ・ニコライ『私の勉学修行時代、批判哲学にかんする私の知識と著作、及びカント、J・B・エアハルト、フィヒテの各氏について』（1799）のこと。

<sup>訳注 5</sup> ニコライの著作がシリーズ本の構成で続巻を持つというのは、フィヒテの作り話である。Vgl. GA I/7, S. 377 Anm. 7.

<sup>訳注 6</sup> ルカ 1・66. Vgl. GA I/7, S. 377 Anm. 8'. ここでフィヒテは、洗礼者ヨハネの誕生を前にして畏れおののく人々の光景をニコライに重ねることによって、ニコライを痛罵している。

<sup>訳注 7</sup> ニコライ以外の人物によって執筆された著名な著作物のこと。

か探求するつもりはない。ドイツ人の場合は、少なくとも次のような結果になった。ようやくドイツ語の書き方を習得したことをいくらか自慢に思い、これもドイツ語だと認めるよう主張し、あらゆる対象についてドイツ語の知識以外にはやはり何も理解していないままに書くことに骨を折った。講演が主要なものとなり、講演の内容はこうした状況に合わせたものになるようであった。すなわち、うとうとしながら化粧台の前に座っている美女でも理解できるように話さなければ、話さなくても一緒というありさまだった。しかも、ただ話せるようになるためだけにしか学ばず、実際にそれ以上に学びが進むこともなかったのだ。そのよう

378 にして理解できない話は、後になって、細かいことにネチネチこだわって屁理屈をこねる術学趣味だと軽蔑された。要するに、くだらない通俗化が日常茶飯事となり、それからは通俗性が真なるもの、役に立つもの、そして知るに値するものの基準となったのである。このような時期に我々が主人公の最初の勉強修業時代が当たったのである。彼はすでに早い時期からひとかどの人間になりたいと思っており、すでに早い時期から自分はひとかどの人間だとうぬぼれていた。彼が当時そうであったように古典的な学識がまったくなくても、しかも、後にはそのような学識があるかのように見せかけて自分を飾り立てていたにもかかわらず、このよううぬぼれが彼のもとを離れることはなく<sup>訳注8</sup>、それだけ一層彼を

訳注 8 アカデミー版の編者によると、これはフィヒテの誤りである。L. F. G. v. Göcking, *Friedrich Nicolai's Leben und literarischer Nachlaß* (Berlin 1820) に収録されているニコライの自伝的報告 (S. 8 ff.) を参照。ニコライに対して古典的教養が欠けていると非難した最初の人物は、ヨーハン・ハインリヒ・フォス (Johann Heinrich Voß, 1751-1826) である。Vgl. Johann Heinrich Voß, „Verhör über einen Rezensenten in der allgemeinen deutschen Bibliothek“, „Folge des Verhörs über einen Berliner Rezensenten“ und „Zweite Folge des Verhörs über einen Berliner Rezensenten“, in *Deutsches Museum*, Bd. 2, St. 8, Leipzig, August 1779, S. 158-172; Bd. 1, St. 3, März 1780, S. 264-272; Bd. 2, St. 11, Nov. 1780, S. 446-460. フォスはそこで、『ドイツ百科叢書』(*Allgemeine deutsche Bibliothek*. 以降, ADB と略記) 第 37 巻に掲載された、ボドマー (Johann Jakob Bodmer, 1698-1783) とシュトルベルク (Friedrich Leopold Stolberg, 1750-1819) によるホメロスの翻訳にかんする書評 (ADB, Bd. 37, Berlin und Stettin 1779, S. 131-169) に反論して

蝕まずにはおかなかったのである。彼にとって不幸だったのは、二人の人間<sup>訳注9</sup>と知り合ったことである。ひとりめ<sup>訳注10</sup>はまちがいなくニコライよりもはるかに心根がまじめで純粋であったが、ニコライと同じく、精神、見識、目的のレベルが低かった。——もしかすると根本においては、この二人の人間のうちの一方には、彼らの宗派のあれやこれやの迷信から身を守り、彼らの信仰箇条をかつてと同様に理性的なものに改め、運がよければそのような信仰箇条がまったくなくても成立しうる自然宗教<sup>訳注11</sup>を樹立するという意図よりも高邁な意図が最初のうちはあったのだろうか。ただし、もうひとりの人物はこの点にかんしても我々が主人公よりもまじめにころからそう考えていたのであるが。——我々が

---

こう書いている。「ニコライ氏は印刷前にこの書評を見なかったのだと私は思う。確かに彼はつい先日、だれもが虫下しとみなすようなもの〔つまりは下手物〕が彼にはすごくおいしいと感じられてきたし、今でもそうだと断言した。しかしながら、それどころかこのお粗末な仕事までもが彼にとっては食欲〔興味〕をそそるものであったなどということは、断じてありえない。この書評者は、[『ドイツ百科叢書』第37巻の] 153頁から判断するに、彼の抱えるベテランのうちのひとりであるように思われるが、このベテラン書評者に対しては、編集長はおそらくきっと仕事を任せてみずから確認することはないのである。だが、今回の書評は、彼の工房が信用を失墜してしまわないように彼の抱えるベテラン書評者たちに対しても強制的に言うことを聴かせろという警告になるかも知れない」(*Deutsches Museum*, Bd. 2, St. 8, August 1779, S. 172)。„Zweite Folge des Verhörs über einen Berliner Rezensenten“では、フォスは次のような判断を下している。「いずれにせよ、ここで特に話題になっているのは、ギリシアの著作にかんする正しい理解であろう。このような著作について、お抱えの批評家たちに対して真理を愛する者であり当該分野の造詣が深いと太鼓判を押しているニコライ氏が、タイトル以上のことを理解しているとは考えにくいのである」(*Deutsches Museum*, Bd. 2, St. 11, Nov. 1780, S. 457-458)。Vgl. GA I/7, S. 378 Anm. 8.

<sup>訳注 9</sup> メンデルスゾーンとレッシングのこと。訳注 8 で触れたニコライの自伝的報告 (a. a. O., S. 17) を参照。「レッシング及び、その後まもなく彼を介してモーゼス・メンデルスゾーンと知り合ったのは、1755 年のはじめのことであった」。Vgl. GA I/7, S. 378 Anm. 9. より詳しくは、戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人——フリードリヒ・ニコライ』朝文社、2001 年、31-32 頁参照。

<sup>訳注10</sup> メンデルスゾーンのこと。

<sup>訳注11</sup> 啓示なしに成立する合理的な宗教のこと。

主人公が知り合った二人の人間のうちのふたりめ<sup>訳注12</sup>は、博学で、生き生きとした、倦むことのない精神の持ち主であり、真なるもの、正しいもの、善きものを求める性格を涵養していた。ただし彼は当時はまだ、はっきりと規定されたものを彼の本質であるところの無限性において把握し保持することは何一つとしてできなかったのではあるが。我らが主人公は、当時はまだ自分以外のすぐれたものを認める能力を一切合切失ってしまったわけではなかったのです、このような強大な力を持つ精神が備わっている二人のことを認めていた。しかしながら、さんざん苦勞した末に、彼のようなまだ確固たる精神を持ち合わせていない者が弄ぶおもちゃを共同で推進する<sup>訳注13</sup>能力をいくらか身に着けた後は、こうしたおもちゃを最高のものとみなし、自分自身のことをかの精神と同等のものと考えようになったのである。

この瞬間に彼の成長は止まって完成し、墮落した。それ以来更なる成長を見せることはなく、正気に返ることはなかった。その後も彼は自分のことをなお、彼が今では適切な助言に従うことのない常軌を逸した天才だと言い立てている、かの精神<sup>訳注14</sup>よりもはるかに高邁な精神の持ち

<sup>訳注12</sup> レッシングのこと。

<sup>訳注13</sup> フィヒテがここで言及しているのは、ニコライがレッシング及びメンデルスゾーンと共同で『文芸美術文庫』(*Bibliothek der schönen Wissenschaften und der freien Künste*)の編集理念をかたちにしたことである。この雑誌は、ニコライが1757年から1759年まで4巻にわたって編集発行したものである。実家の出版社を継ぐためこの雑誌の編集職を退いたニコライは、その後自分の出版社から、『最新文学にかんする書簡』(*Briefe, die neueste Literatur betreffend*)を1759年から1765年まで編集発行した。これもまたレッシング及びメンデルスゾーンとの協力の賜物である。Vgl. GA I/7, S. 379 Anm. 12. 戸叶, 前掲書, 31-39頁参照。

<sup>訳注14</sup> アカデミー版の編者は、ニコライが編集した、レッシング-ラムラー、エシェンブルク、メンデルスゾーン、ニコライ間の『往復書簡』(*Gotthold Ephraim Lessings Briefwechsel mit Karl Wilhelm Ramler, Johann Joachim Eschenburg und Friedrich Nicolai. Nebst einigen Anmerkungen über Lessings Briefwechsel mit Moses Mendelssohn*, Berlin und Stettin 1794)に見られる、レッシングにかんするニコライの判断のことをフィヒテが言っているのだと推測している。同書の「序文」(„Vorrede“, S. V/VIII)参照。「レッシングの死後、私たち二人の友人であるモーゼス・メンデルスゾーンがレッ

主だとみなしているのだ。

我らが主人公は、二人と一致団結して、批判的な改革運動に取り組んだ。これは、若干のへっぽこ詩人に対しては決定的に重要な意味を持ったが、他の分野、たとえば哲学の分野ではそれほど輝かしい栄光に満ちた成果を収めたわけではなかった。彼の偉大な同志は次第に、この事業はひどいものであること、そして、最高の仲間たちと共に推し進められているわけではないことを自覚するようになった。我らが主人公はこの事業から身を引き、これからはこの仕事をさらに発展させ、自分自身を、否、自分だけをドイツ文学・芸術の中心人物として打ち立てる決心をした。『ドイツ百科叢書』の発刊<sup>訳注15</sup>である。これはそれ自体がたわけた試みであり、そのやり方によってひどい影響をもたらすものとなっており、創刊者自身にとって図抜けて有害なものであった。

我らが主人公は、「全文学・芸術を包括する定期刊行物の編集者は、全文学・芸術を包括的に理解していなければならない、しかもどの個別の分野においても、同時代のだれよりも高見に立って、あらゆる事柄についてだれよりもよく知っていなければならない」というきわめて真っ当な

---

シングの人となりにかんする小本を執筆しようとするに至った。執筆のために彼は私に、レッシングが私に宛てた全書簡を請求し、私は彼に当然ながら喜んで渡した。彼はそれらに全部目を通し、私たちは何度もレッシングについてどんな本を書いたらよいのか話し合った。しかしながら、それにもかかわらず実現しないままになったのはさまざまな邪魔が入ったためであり、特に、『ゴータ学術新聞』（*Gothaische gelehrte Zeitungen*）〔訳注：1774年から1804年にテューリンゲンのゴータで刊行された書評誌〕に採り当てた人物発で、モーゼスがそのような本を執筆中だというニュースが掲載されるなどといった不愉快なことがあり、それ以来、野次馬から絶えずその件で彼に問い合わせが来たり、一体どんな内容が盛り込まれるのかといった推測が飛び交ったりして煩わしくなったというのが大きかった。私たちの文学にとってモーゼスがこの本を執筆しなかったことは損失であり非常に重大なことであるが、それは、ドイツで非常に一般化している逸話漁り、ないしはむしろ噂話が引き起こした最初の損失ではない。ありきたりの頭脳の持ち主はだれしも議論においておおよそ耳にしたこと、ないしは中途半端にしか耳にしていないことをそっくりそのまま印刷させて偉ぶっているのだから。Vgl. GA I/7, S. 379 Anm. 13, 398 Anm. 9.

<sup>訳注15</sup> 『ドイツ百科叢書』は1765年の発刊。



前提命題から出発したのかも知れない。彼はどの分野においても最も偉大な大家に数え入れられる者を評価するためにそうした大家を〔書評者として〕選ばなければならないし、そうした大家を見つけ、彼らに感謝させるすべを心得ていなければならない。いやそれどころではない。全分野にわたるこうした最も偉大な大家たちを大局的な見地から見渡し、彼らが寄稿した評価を査定しなければならないし、彼らがふだんどおり勤勉に徹底して執筆しているかどうか、たとえば彼らが落ち目になっていないかどうか、あるいは、彼らと並んで、もっと若くてすぐれた人たちが台頭していないかどうか見極めることができねばならないのである。

このような真つ当な前提命題からさらに論を進めて、「私には少なくともこの必要条件が備わっていないし、私について言うと、上述の『ドイツ百科叢書』の理念はおそらく実行段階には至っていない」という答えに辿り着く代わりに、彼は次のような真逆の結論に達していた。「かの理念どおりに実行しようと思っているのだから、私はそのことを認め、  
380 どんな要件であろうがすべて私には備わっているかのような態度を取り、全分野をカバーする博識家にして、同時代及びあらゆる過去や未来の時代で最も才気があふれ審美眼を有する人物であるかのようにふるまう必要がある。嘘偽りがないという称号を力の限りを尽くして我が手に奪い取らねばならない。かの理念を實踐する者はあらゆる分野の最も偉大な人物を認識し、選び、彼らとの交流を結ばなければならないのだから、前提命題の前後をひっくり返し、私が認識し、選び、交流を結ぶであろう者こそがそれぞれの分野で最も偉大な人物だという命題を採択せざるを得ないのだ」。

我らが主人公が自分自身について、これからはもちろん世間をすべて敵に回して主張するとともに揺らぐことなく当然の前提とみなさねばならないものがあると、その当時もうすでに大まじめに信じていたのかどうか見定めるのはむずかしい。これが一番ありそうなことだと思うのだが、彼は、自分が十分に確信しているわけではない内容の発言を絶えず繰り返している者がみな陥るような状態にあったのではないだろうか。結局のところ、そんなことをしている者自身、自分が言っていることが真理だと信じてしまうものである。それはありうることだ、ニコライは



自分にかんするかの前提について、そうみなすことができたのだ。彼には自分よりも高いレベルの知恵が自分以外のどこにも見当たらなかったが、それは、彼が自分の所有する知恵しか理解しなかったからである。彼のところで高次の者の予感と言われていた魂の力など、彼には昔からまったく欠けていたのではあるが。このような前提の現実味に対して彼も、当時はもしかするとまだ全幅の信頼を置いていたわけではなかったのかも知れない。しかしながら、彼の発行している叢書の編集の仕事に就いてからというもの、彼は人生のすべての時間を費やしてかの意見を当然の前提とみなし、この意見を主張し、この意見に対する疑念の逐一を力の限りを尽くして打ち消さねばならなかったのであり、このような仕事から解放されて落ち着きを取り戻すことはけっしてなかったのだ。そういうわけだから、このような信仰が長年に亘って彼にしっかり取り憑いて離れないという状況に陥らざるを得なかったのはなぜか、十分に納得できるだろう。

かの叢書の試みは時代を捕らえた。安楽な知恵と陳腐な学識がこの大きな仕事によってもたらされ、あつという間にドイツの端から端まで広まり、喝采を博した。読者の中で最低の者は自分自身で書いた物を読んでいるつもりになった。まったく同じようなことを彼も昔から考えていたのであり、ただたんにそのことを公然と認める勇気がなかっただけのことである、と。未成年者は言語を習得し、そのことにご満悦だった。我らが主人公が目当たりにしたのはこのような大変革であり、この革命を起こした者、これを迅速にあまねく啓蒙した者、この革命の大本が彼だったのである。彼の仕事に対する他者の信仰が彼自身の自己に対する信仰を強化しないはずがなかろう。

大衆の喝采を博すことが重要な書き手は、このような喝采を送ってくれる者の周りに集まり、その者に貢献し、その者の助言とご指導ご鞭撻を求め、あらゆる仕方でもってその者の虚栄心をくすぐった<sup>原注(2)</sup>。人は簡単に自分の願っていることを信じてしまうものである。ニコライはまったく無邪気にすべて真に受けたのであり、こういった数々の称賛の声は、ひょっとすると『ドイツ百科叢書』の編集者に向けられているだけであって、彼の個人的な功績に宛てられたものでは断じてないのかも知れないという考えが彼のところに思い浮かぶことはなかった。かの

人々は、そんなこととはおかまいなく、この叢書への寄稿者として、お国の第一線の頭脳として、彼が原理とする方針に従っていたのである。だから彼は、自分はお国の第一線の人々の称賛と承認を受け、彼らの師として君臨しているのだと自認していた。彼らのことを信じていたからといって、だれが彼のことを悪く言えるだろう。

このようにして彼の魂の中では次第に、ドイツ文学・芸術の概念が彼の叢書の概念と、そして両概念が彼自身の概念と融合していったのである。この叢書は彼にとってドイツの精神の中心となり、彼自身はこの中心の内奥の魂となった。この叢書の批評に沿ってこの国の文学上ならびに芸術上のあらゆる意欲的な試みが行われねばならなかったし、同様に、彼の見識に沿ってこの批評活動が行われる必要があったのだ<sup>訳注16</sup>。彼からすると、その当時もこれからもずっと、かの叢書を除いては学問にとっての安寧と真理は存在しなかったのであり、この叢書自体にとっては安寧と真理は彼を除いては存在しなかったのである。かの叢書が彼の世界であり、彼がこの世界の魂であった。彼が見たものはかの叢書を通して見たものであり、かの叢書は彼が自分自身を通して見たものだったのである。このような安らかな気分のうちで彼は生き、自分の業績は不滅だというおめでたい信仰のうちに亡くなった。

## 原注

- (1) 文中で 1803 年と述べていることについては事情は以下のとおりである。<sup>訳注17</sup>ニコライは旅行記第 11 巻において、フィヒテとその全

<sup>訳注16</sup> 『ドイツ百科叢書』はドイツで最もよく読まれていた学術誌であり、1770 年代の終わりと 1780 年代の初めに発刊以来最大の発行部数に達していた。文芸新聞のなかには『ドイツ百科叢書』の決定的な影響下にあるものもあったほどである。『ドイツ百科叢書』の批評は専門家の判断に対しても強い影響力を持っており、それゆえ非常に名の知れた著述家でさえ、『ドイツ百科叢書』や編集者兼発行者のニコライや彼の抱える約 150 人の批評家が下す判断と対立する立場を取ることを恐れていた、ということである。Vgl. GA I/7, S. 381 Anm. 15.

<sup>訳注17</sup> アカデミー版全集にはここに「..」があるが、これを受ける「<sup>1</sup>」がないので、SW 版に倣って「<sup>1</sup>」はないものとして訳した。

著作は1840年にすっかり忘れ去られてしまうことになろうと予告していた<sup>訳注18</sup>。彼はこの点について、他にもかなり多くの点でそうなのだが、『永遠のユダヤ人による哲学のぞきからくり箱にかんする書簡<sup>訳注19</sup>』において嘲笑の的とされていた。立腹した彼は、私の思い違いでなければ『クセーニエ』に異を唱える著作<sup>訳注20</sup>において、こうなっ

てはフィヒテに1840年までの猶予さえ許されるはずもない、1804年

382

<sup>訳注18</sup> ニコライ『ドイツ・スイス旅行記』第11巻（1796）参照。「彼らが1795年に無条件だとみなしたものが1840年に条件付きのものとなる可能性はないのだろうか」（S. 189）。Vgl. GA I/7, S. 381 Anm. 3.

<sup>訳注19</sup> ヒエロニムス、エウセビオス、アウグスティヌスにかんする哲学博士にして、文法学、修辞学、弁証法、算術、幾何学、天文学、音楽といった全自由七科の修士『永遠のユダヤ人による、最新の、予言的な、哲学のぞきからくり箱にかんする書簡。ゲハイメンラート・シュヴァープ氏が最新の懸賞論文で行った批判哲学に対する反論にかんする補遺論考を添えて』（Hieronymus Eusebius Augustinus Doktor der Philosophie und Magister aller sieben freyen Künste, als da sind: Gramatik, Rhetorik, Dialektik, Arithmetik, Geometrie, Astronomie und Musik, *Briefe über die allerneueste prophetische Guckkastenphilosophie des ewigen Juden. Nebst einem Anhang über die von dem Herrn Geheimenrath Schwab in seiner neusten Preisschrift gemachten Einwürfe gegen die kritische Philosophie*, o. O. 1797）のこと。著者は、ヨーハン・ゴットフリート・イマヌエル・ベルガー（Johann Gottfried Immanuel Berger, 1773-1803：プロテスタントの神学者）。併せて、以下の原注(1)、(2)の記述を参照。Vgl. GA I/7, S. 381 Anm. 4.

<sup>訳注20</sup> ニコライ『フリードリヒ・シラーのミューズ年鑑1797年版に対する補遺論考』（*Anhang zu Friedrich Schillers Musen-Almanach für das Jahr 1797*, Berlin und Stettin 1797. 以降、『補遺論考』と略記）のこと。その30-31頁にこうある。「私はこの機会に、最近私に異を唱える書物、『永遠のユダヤ人による、最新の、予言的な、哲学のぞきからくり箱にかんする書簡』が執筆されたことをお知らせしておこう。その中身であるが、その人物の結論によると、私は長期で広範囲の旅行をするので、永遠のユダヤ人であろうということである。その人物はシラーの『ミューズ年鑑』に収録されている『クセーニエ』のように機知に富んでいると見られており、何と報酬までも受け取っているというのだ！ しかしながら、重要なのは、137頁に見られる次のような記述である。「フィヒテの名前は来世紀には、もしかするともう間近に迫った来世紀が始まるのとちょうど同時に、畏敬の念を抱きながら呼ばれることになるだろう。そのとき、今現在フィヒテに固有の大言壮語とみなされていたものはすべて真理だと認識されることになるだろう」。私はすで

にはもう忘れられてしまっていよう、と宣告表明していた。1800 年は過ぎ去り、1801 年が幕を開けた。予言で言われた宿命の年が近づいたが、その予言が実現し始めた痕跡は見られない。このことは、冒頭で言及した紹介書評を書いた我らが主人公の良心に重くのしかかっていた。それでも彼の見立てはこうだった。「別の学識者たちはおそらく、新しい哲学などが細かいことにネチネチこだわって屁理屈をこねている裏には何かあるのだと信じるのがお好みなのだろう。しかしながら彼が言えるのは、そんなことは無意味であり、1803 年には新しい哲学などについてそれ以上のことが語られるだろうということである<sup>訳注21</sup>」。当然ながら、1804 年にこの哲学はすっかり忘れ去られてしまうのだとすると、少なくとも 1803 年にはこの哲学が無意味なことが明らかにされていなければならないだろう。

### 383 (2) 無論のこと、ドイツの学識ある者たちがそれほどまでにわざわざ

に私の旅行記においてこの種の事柄について、1840 年に照準を合わせて名誉を毀損することを書いたが、著者の気に入るように、私も喜んで照準を 1804 年に合わせることにしよう」。ここで言及されているベルガーの書の引用箇所は、実際にはこうなっている。「フィヒテの名前は来世紀には、もしかするともう間近に迫った来世紀が始まるのとちょうど同時に、現在カントの名が、かつてはデカルト、ライプニッツ、ヴォルフの名が博したのと同じように、畏敬の念を抱きながら呼ばれることになるだろう。そのとき、今現在フィヒテの大言壮語とみなされていたものはすべて真理だと認識されることになるだろう。そして、偉大な頭脳の持ち主はだれしも自分の時代の数歩先を進んでいたのと同様に、フィヒテも自分が発見した真理について、他人を得心させるよりも早く自分では確信を持っていたということが理解され、彼がみずからの確信について包み隠さずにいたことがもはや奇妙奇天烈な大風呂敷だとみなされることはなくなるだろう」。Vgl. GA I/7, S. 381 f. Anm. 5.

<sup>訳注21</sup> 本書の「序論」の訳注 4 (『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第 17 号、2018 年 3 月、107 頁) に挙げたニコライの一連の書評の以下の文章を参照。「かなりの学識者たちはもしかすると、理性的な人であればシェリング、フィヒテ、A・W・シュレーゲルの各氏に備わっていることを否認することがまったくないような知識と才能に対して尊敬の念を抱いているのかも知れない。そうすると、残りの人たちはあわれな罪人になるのだが。このような尊敬は簡単にこんな推測へと向かうものである。すなわち、自我の哲学とそこから導かれる思弁的自然学や詩学は細かいことにネチネチこだ

我らが主人公をほめそやしていたのかどうかということに疑念を持つものが出ないように、彼みずから『クセーニエ』に異を唱える自身の著作においてこう表明していた。「彼は昔から非常にほめそやされていた<sup>訳注22</sup>」。

わって屁理屈をこねてぐだぐだと悩んでいるが、ときおりはなはだしく深い意味があるような外観を呈することもあるのだから、その裏にはもしかすると——こうした諸学問についてはただたんに、いまだに完全に把握・理解されているわけではないといった状況なのだから——何か非常に重要なことが隠れているのかもしれない、と。こういうわけで、こうした学問をつねに展開し、とりわけこれらをかなり頻繁に使用する努力がなされるのかも知れない。[しかしながら、]こうした展開が行われれば行われるほど、任意の想定の下に立てられた、中身のない屁理屈が絶えず繰り返されていることが明らかになる。そして、自我の哲学者たちのうぬぼれがこうした学問を別の諸学問に適用することによって自然学、詩、ならびに芸術が全面的に刷新された姿を示そうとすればするほど、この適用によってこうした学問の無意味さがより一層はっきりと判明するのである。超感性的な哲学はみな、感性界を自分の妙な考えに従って作り直すならば無に帰してしまう。そしておそらく、善意に基づいて真理を求める新しく構想された文芸新聞の寄稿者たち（これはたとえば、真理は超越論的観念論において見いだされるのであり、さもないとそれ以外のところで真理が見つかることはないだろうといった要求を突きつけ、そうしたことをすでに前提してしまっているような最新の観念論者たちとは異なる）がしばらくしてから——『一般文芸新聞』で進行しているのと同じように——とりわけ、すでに前もって予測されるように、超越論的観念論者ならびに超越的天才がやっかいな隣人であることが寄稿者たちにもわかった場合には、神聖視された一派の党派性を恥ずかしく思い、その押しつけがましさに辟易とする、といったことにもなる。今述べられたすべてのことについて、1803年頃にもっと語られることになるだろう」（NADB, Bd. 56, St. 1, Berlin und Stettin 1801, S. 167-168）。Vgl. GA I/7, S. 382 Anm. 6'.

<sup>訳注22</sup> 『補遺論考』、7、8頁。「40年来の付き合いで親密な間柄である大勢の優秀な人々と偉大なドイツの学識ある者たちが私について、ドイツにおける学問の進歩、啓蒙の普及、かなりの有用な知識の発展に何らかの貢献をしたのであり、それゆえ我らが祖国ドイツのために生きたというのはいわれないことではないと思ひ込んでいた。[...]『ミューズ年鑑』は、私がドイツの偉大な学識ある者や世間から何年にも亘ってほめそやされてきたであろうことを非常によく知っているのかも知れない」。Vgl. GA I/7, S. 383 Anm. 16.

### 第3章 我らが主人公の生涯におけるこの最高原則の おおよその現れ方

我らが主人公の周知の言動や、彼の時代には一般に流布していた彼にかんする若干の逸話によると彼は、人間の知のあらゆる対象を模範的に扱う能力があるのはもっぱら自分だけだと主張していた。彼は、彼の臨席している場で話題が何かそのような対象に向けられるたび毎に、残っている仕事のおかげでその対象の扱いにかんする模範を示す時間がないことを嘆くのが常だった。彼はこの山積みの仕事があるにもかかわらずなおも時間を見つけてそうした対象に取り組んでいたのだが、そのすべてについて実際にも模範にふさわしい仕事ぶりを示していた。だから、彼が書いたベルリンの地誌<sup>訳注23</sup>はこの種のすべての業績が見習うべき模範であったし、彼はすべての機会を捕らえて、その著作をそのようなものとして推奨していた。それは彼がつねに付け足して言っているように自慢からではなく、実際にそうだからであった<sup>原注(1)</sup>。彼が時間をとってやれなかったことに、彼の同時代の人はどうやら取り組んでいるようであった。彼らが模範「となる彼」にはけっして到達できないこと、我らが主人公にそうする時間があればできたであろうほどのことを彼らが成し遂げることはけっしてないことは自明であった。しかしながら彼らには、そう、彼が傍に付き添っているのであった。つつましやかに請い求め<sup>訳注24</sup>ば、彼が進んで助言を与えてくれたのである。

この助言を彼らは教えを待ち焦がれるようにして従順に受け入れ、彼

<sup>訳注23</sup> 『王都ベルリンおよびポツダムならびにそこにあるすべての珍しい事物についての記述。フリードリヒ・ヴィルヘルム大選帝侯の時代以降ベルリンに住んでいたすべての芸術家の生涯ないしそこにある彼らの芸術作品を含む補遺を添えて』(*Beschreibung von Königlichen Residenzstädte Berlin und Potsdam und aller daselbst befindlicher Merkwürdigkeiten. Nebst einem Anhang, enthaltend die Leben aller Künstler, die seit Churfürst Friedrich Wilhelms des Großen Zeiten in Berlin gelebet haben, oder deren Kunstwerke daselbst befindlich sind*, Berlin 1769) のこと。

<sup>訳注24</sup> erfuchte を ersuchte に変更するアカデミー版の校訂に従う。Vgl. GA I/7, S. 384 Anm. a'.



の理念をますますよりよいかたちにするべく努力し続けねばならなかった。彼らはつまりは、彼に不足している実行する時間さえ提供すればよかったのであり、精神と概要については彼が提供するという思惑であった。こうして彼らはますます高いレベルに上がり、絶えず模範である彼に近づいていくことになるというのだろう。このような仕方では、彼の叢書に集い手ずからの助言を受ける学派において、この国で最も偉大な書き手たちを育ててきたのである。そのひとりがレッシングであり、彼は残念ながら晩年に転向して独善的になって従順でなくなり、そのため当然の報いとして、この叢書が進める啓蒙の徹底性とメンデルスゾーンの論証の明証性に対して疑念を抱くようになってしまっただけである。その中にはまた、メンデルスゾーン、ユストゥス・メーザー<sup>訳注25</sup>もいたし、あまりにつつましやかなので名を挙げることを慎まねばならないような、まだ存命中の非常に多くの人々も含まれている。彼は書き手ばかりでなく、自分の出版書店が発行しているこの叢書と『ベルリン月報』——私は目撃者として誓って言えるが、ベルリンでいまだに定期的に刊行されている<sup>訳注26</sup>——に掲載されたドイツの学識者たちの肖像によって若い造形芸術家をも引き寄せ、励まし、支援していた。このような教育はその中心である彼から始まり、辺り一帯に均等に広まった。

このような落ち着いたある整然とした穏やかな歩みは、今や若干の突飛な頭脳の持ち主によって乱されてしまった。芸術においてはゲーテとシラーが、哲学においてはヤコービやカントや超越論的観念論者たちが現れたのである。彼らにはこの点にかんしてどんな責任があったのだろうか。——最初に『ドイツ百科叢書』でニコライの監督下で執筆する練習をすべきだったのだろうか。それとも、実行に移す前に彼に自分たち

<sup>訳注25</sup> ユストゥス・メーザー (Justus Möser, 1720-1794)：ドイツの批評家、著述家。オスナブリュックの出身で、ハノーファー行政府で枢密院顧問官試験補 (Geheimreferendar) を務めるなどして出身地で指導的役割を果たす。文学者、法学者、歴史家として著述は多岐にわたる。

<sup>訳注26</sup> 1783年から1796年まで刊行された『ベルリン月報』(Berlinische Monatsschrift) は、『ベルリン新聞』(Berlinische Blätter, 1797-1798)を経て、1799年からは『新ベルリン月報』(Neue Berlinische Monatsschrift) として刊行されていた (1811年まで)。



の構想を示し、その件について彼と書簡のやり取りをすべきだったのだろうか。よき時代のレッシングやメンデルスゾーンならびに傑作を生み出しているすべての人々のように。やるべきあらゆることのうちのどれひとつとして彼らは実行しなかったのである。彼らはあまりにも良識を欠いていたので、彼の出版書店に自分たちの仕事を持ち込むことは一度もなかった。それは彼らが自分たちの仕事にかんして彼の出版書店の基準に照らすとどのようなものだったのかを知り、そうした仕事について自分たちがどのような判断を下す必要があったのか聞ける最後のチャンスだったのだが。

したがって、彼らが芸術作品や発見だと思い込んでいるものにはまったくどんな可能性もなかったということは直接明らかなのであって、更なる精査や検討を行ってもともと非常に限られた時間を失ってしまう必要はないのであった。我々が主人公が他のだれも使っていないと信じていた、笑止千万という殺し文句でもっていとも簡単にそうした作品や発見もどきを斥けて進むことができたのである。そういうわけで、『ヴェルテルの喜び<sup>訳注27</sup>』、『クセーニエ』に異を唱える機知に富んだ著作<sup>訳注28</sup>、『肥った男<sup>訳注29</sup>』、『ゼンプロニウス・グンディバルト<sup>訳注30</sup>』、ゆかいな旅行記<sup>訳注31</sup>、といった作品が次々と発表された。私の知るところでは、確か

訳注27 『若きヴェルテルの喜び。成人したヴェルテルの悩みと喜び』(*Freuden des jungen Werthers. Leiden und Freuden Werthers des Mannes*, Berlin 1775. 以降、『ヴェルテルの喜び』と略記)のこと。

訳注28 『補遺論考』のこと。

訳注29 『肥った男の物語。三度の結婚、三度の求愛の拒絶、そして多くの恋愛について』全2巻(*Geschichte eines dicken Mannes worin drey Heurathen und drey Körbe nebst viel Liebe*, 2 Bände, Berlin und Stettin 1794. 以降、『肥った男』と略記)のこと。

訳注30 『ドイツの哲学者、ゼンプロニウス・グンディバルトの生涯と意見。最新ドイツ哲学の二編の資料を添えて』(*Leben und Meinungen Sempronius Gundibert's eines deutschen Philosophen. Nebst zwey Urkunden der neuesten deutschen Philosophie*, Berlin und Stettin 1798. 以降、『ゼンプロニウス・グンディバルト』と略記)のこと。フィヒテはニコライに異を唱えるために、この本に似せて自分の著作のタイトルを付けたことは言うまでもない。

訳注31 『ドイツ・スイス旅行記』(全12巻, 1783-1796年)のこと。

以上が発刊されたもののすべてである。

確かに、かの突飛でひねくれ者<sup>訳注32</sup>の輩のうちには才能も知識もすべてまったくないとまで言えないものも若干いたが、ただし、そうしたものは、正統な学派との交流を持たずに自分だけでこの才能に正しい方向づけを与えることができるといった自己愛に満ちた意見を押しえ込んでいるだけだった。このような、ひょっとするとあるかも知れない程度の天賦の才であっても役立つものにし、ドイツ文学に、すなわち『ドイツ百科叢書』との交わりに戻そうと努める必要があった。したがって我らが主人公は、かの人々がたとえば反省して正しい道をとることを望んでいない場合には、きつく譴責する必要があると感じていた。彼の年代記の作家が彼の骨壺を前にしてあふれんばかりの確信に満ちて言うには、彼を見れば、彼を突き動かしているのは個人的な憎しみや敵意では断じてなく、つねに文学に対するまっすぐな情熱であったこと、厳粛かつ事細かに鞭を入れるという職務に対してはむしろ一種の愁いを感じていたことがわかったという（もちろん、彼は小さくついでに鞭を入れるというかたちを取ることによって多少軽めになるようにしていた）。つまり、処罰を受ける者自体に対する秘められた父親のような好意によって文学に対する燃えるような情熱にある種の感動的なまでの寛容さがいかに混じっているのか気づいたし、無論のこと、譴責を受けた者自体がいつか悟性〔正気〕を取り戻す日が来れば彼に感謝の言葉を告げるであろうことを彼がどれほど予感しているのかがわかったというのだ。だから彼は、ひとりの人間に対する希望をすべて棄ててしまう気には簡単にはなれなかったし、こうした希望を示して罪人から改善する気力をすべて奪ってしまわないようにすることに長けていたのである。

ある者が実際改善されるということがたまたま起こった場合に、彼がその者に再び目をかける時に見せる寛大さは感動的であった。最近のことだが、完全指向が非常に高いクルーク<sup>訳注33</sup>とかいう名の男がおり、当

訳注32 『ドイツ・スイス旅行記』第11巻、206-232頁に収録されている「哲学的ひねくれ者たち」(„Philosophische Querköpfe“)というタイトルの項を参照。Vgl. GA I/7, S. 385 Anm. 9.

訳注33 ヴィルヘルム・トラウゴト・クルーク (Wilhelm Traugott Krug, 1770-1842) : 1796年からヴィッテンベルクの哲学部助手。1801年、フランクフル

- 386 然ながら、哲学的ひねくれ者全般に対する破門宣告の対象として連座していた<sup>訳注34</sup>。この者は反省し、我らが主人公に他の哲学者たちの畑の落ち穂拾い<sup>訳注35</sup>を出版のために持ち込んだ。おそらく彼はニコライの助言も取り入れたであろう<sup>訳注36</sup>。なぜなら、ニコライは自分のところで出版をしてもらおうとする者に対してはだれにでも助言を与えるのが常

ト・アン・デア・オーデルの特任教授 (a. o. Professor) (哲学)。フィヒテが「完全指向が非常に高い」という形容詞句を用いているのは、クルークの『啓示宗教の完全指向にかんする書簡』(*Briefe über die Perfektibilität der geoffenbahrten Religion*, Jena und Leipzig 1795) へのあてつけ。Vgl. GA I/7, S. 385 Anm. 10.

<sup>訳注34</sup> 『ドイツ・スイス旅行記』第11巻, 127頁参照。Vgl. GA I/7, S. 386 Anm. 11.

<sup>訳注35</sup> クルーク『私の人生哲学からの断章』第1集・第2集 (*Bruchstücke aus meiner Lebensphilosophie*, 1. Sammlung und 2. Sammlung, Berlin und Stettin 1800 und 1801) のこと。Vgl. GA I/7, S. 386 Anm. 12.

<sup>訳注36</sup> クルークはこのようなフィヒテの推測に対して、『一般文芸新聞』(*Allgemeine Literatur-Zeitung*. 以降, ALZ と略記) の1801年6月25日付の「知的広報」第140号 (*Intelligenzblatt, Numero 140*) において反論をした (Coll. 1125-1128)。「たんなる商売上の外的な関係から真の意味で文学にかかわる内的な交わりについて推し量ることは、おそらくF氏自身がわかっているように、はなはだしく誤った推論であろう。しかしながら、彼がそのような交わりをただたんに推測しただけだとすれば、たんなる「おそらく…であろう」を公の場で厳しく批判する理由にしたことは、少なくとも非常に軽率だったことになる。書き手がある特定の本のために、まさにこちらの出版書店がよいとか、あちらがよいとかを選んだ理由は種々様々でありうるものだ。公衆がそのような理由について知ることにはどれだけの重要性があるのだろうか。F氏の現在の状況ではそのことに重要性があったというのなら、——彼が差し支えなく有罪判決を下すためには事前にはっきりと、私自身について、どうしてN氏に本を、もっと言うなら、他でもないこの本を出版してもらったのかを知っていなければならなかった[……]ことになるわけだが、——私にかんするそういう情報を入手することは簡単にできたことだろう。私には、そうした場合には彼[F氏]が別の判断を下したであろうことがわかっている」(Coll. 1125-1126)。Vgl. GA I/7, S. 386 Anm. 13. なお, *Intelligenzblatt* の訳語の採用については、次の文献に依拠した。田端信廣『書評誌に見る批判哲学——初期ドイツ観念論の展相——『一般学芸新聞』「哲学欄」の一九年——』晃洋書房, 2019年。

だったからである。そうしたことがあったために、神もこのクルークなる男を祝福し、彼自身という大地から『ドイツ百科叢書』の哲学系の批評家の気持ちを代弁するようにして書かれた法学書<sup>訳注37</sup>が芽吹くという恵みを与えた<sup>原注(2)</sup>。当時はだれもが、若者はすぐに飛び込みさえすれば時とともにおそらくニコライ自身の編集している『ドイツ百科叢書』の正規の批評家にさえ昇り詰めることができるだろうという意見であった。

## 原注

- (1) たとえば、ニコライの旅行書の第6巻、337頁以下<sup>訳注38</sup>を参照。
- (2) 冒頭で言及した<sup>訳注39</sup>紹介書評が掲載されている『新ドイツ叢書』の分冊（第56巻第1号第2分冊）の、この紹介書評のすぐ前に載って 387 いるクルークの本の書評<sup>訳注40</sup>を参照。

<sup>訳注37</sup> クルーク『法哲学のための箴言集』第1巻（*Aphorismen zur Philosophie des Rechts*, Bd. 1, Leibzig 1800）のこと。Vgl. GA I/7, S. 386 Anm. 14.

<sup>訳注38</sup> 『ドイツ・スイス旅行記』第6巻、1785年、337頁以下。「自慢したり、他人に自分のことを模範として示したりするのは私の流儀ではない。しかしながらここで私は、[公共の]利益を生み出すために、この信条に抵触することをしなければならない。大概の人が私に敬意を表し、私の著作『ベルリン記』を模範だと言ってくれた。都市部の地誌を執筆している人はほとんどみな[...]私の章立てに多かれ少なかれ同意してくれた。私の願いはただひとつ、この本の上辺だけでなく、むしろ、そのような記述を有益なものにしている大本である中身の体系的構成、判明性、網羅性、そして精確さに気づいていただくことである。[...]私は当時すでに、都市部の地誌がない状況でかくかくしかじかのことが精確に観察されることがわかり、非常にわくわくしたが、ある都市について書きたいと思っているものはだれしも、そんなふうに事を進めるのが自然なことだと思われる。[...]私の後から刊行された地誌できちんと目的に沿って整理されているものはない」(S. 337-338)。Vgl. GA I/7, S. 386 Anm. 2.

<sup>訳注39</sup> 本書の「序論」の訳注4（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第17号、2018年3月、107頁）参照。

<sup>訳注40</sup> Rezension: „Aphorismen zur Philosophie des Rechts, von Wilhelm Traugott Krug. Erster Band, Leibzig, bey Roch und Compagnie. 1800. 170 S. 8. 16 g.“, in NADB, Bd. 56, S. 134-141. 「Fl.」の署名あり。

## 第4章 この最高原則に拠れば、あらゆる論争において我らが主人公にとって何が重要だった【と言える】のか

我らが主人公がちょうど、世に助言を与えたり、愚かな行いを否認し譴責すべく公の場で口を開きかかっているときにはいつも、愛すべき慎み深さから、何よりもまず、その問題をストレートに話題にすること、このタイミングにこのきっかけでそうすることについて詫びを入れた。この点については、彼はつねに十分な理由を述べていた。しかしながら、話題にしていることを自分が理解していることや、真実、嘘偽りのない純粋な真実を言えることについては、けっして証拠を示さなかった。この点について読者や敵対者のだれかが疑念くらは抱くだろうなどとは思ひ及びもしなかったのである。

だから彼は、旅行記の第11巻でテュービンゲンから『ホーレン<sup>訳注41</sup>』、『ホーレン』から新しい哲学へと標的を移してくさしたと思ったときに、こう嘆くことから始めたのである。世に不愉快な真実を告知知らせることがとにもかくにも自分のなすべき仕事であると思われた<sup>訳注42</sup>、と。  
 388 そしてそれに続けて、彼の言う不愉快な真実を語ったのだ。読者はみな納得し、敵対する者はみな恥じ入った。敵対者たちはこれまで自分たちが正しくないということを自分で十分意識しながら精力的に活動しているものの、もっぱら『ドイツ百科叢書』においては前代未聞の新しいものを〔世の中に〕呈示して人目を惹いているだけのことであって、だからニコライはその実態を明らかにしたいと思っていた。そうではなくて、彼らが自分たちは正しいと実際に信じ込んでいるような場合には、彼らに本当の真実を言うんだというニコライの断言に基づいて、してみるとやはり自分たちが正しくないのだろうと気づかねばならなかったのである。

だから、彼は自分の友人が口頭で述べた異論や疑念のすべてに対して、

<sup>訳注41</sup> シラー編『月刊 ホーレン』(*Die Horen eine Monatsschrift herausgegeben von Schiller, Tübingen 1795-1797*)。

<sup>訳注42</sup> Vgl. *Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz*, Bd. 11, „Vorrede“, S. II fg.; GA I/7, S. 387 Anm. 1.

特に後々の哲学上の諍いのことを考えて、どんなことについてもぎっくばらんに話し、真実を言わねばならないという態度で臨むのが常だったと言われている。真実がお気に召すか召さないか、真実を言うことによって敵を作ってしまうことになるのかならないのかなどと気にかけることなどあってはならないのだ。これとは正反対の格率が罷り通るのだとすれば、『文学書簡<sup>訳注43</sup>』が執筆される必要もなかっただろう。だから彼は、その問題にかんしては彼の方が正しくないなどとだれかが信じ込む可能性があるという推測に対していつまでも頑なに抵抗していた。そして、ああした警告を発してくれているのは引っ込み思案な友人たちが自分のことを思って心配してくれているからにちがいないが、そうすることによって彼らは、彼が慎重な姿勢から自分の個人的な安らぎのために真理の問題を放棄するように誘惑しているのだ、と考えていたのだ。

## 第5章 この最高原則に基づく、我らが主人公の実際の論争方法

さて、実際の論争の段になると、我らが主人公の唯一の目の付け所は、事実の真理をつきとめ、敵対する者に対して我らが主人公の言動を否認するという退路を断つことであった。このような場合に彼は、いつもの 389  
ように慎重かつ精確なやり方で臨んだ。彼はこの点だけを最初に片づけたかったので、あっさりと最終的な判断に踏み込んだ。なぜなら彼は、敵対者たちが彼の言動を彼の口から再び聞かされねばならない状況であればそこから彼が彼らのことを認めていないことは簡単に察知できるのだから、すぐに心の底から恥ずかしいと思い、自分たちのまちがいを認め、これを後悔すべきなのだが、おそらく無理だろうと想定してしまうほどまでに、敵対者たちが良識を持っていることに対する信仰を棄てることはけっしてできなかったからである。

そう言えばあの頃のイェーナでは一般文芸新聞<sup>訳注44</sup>などと称するものが刊行されていたのだが、我らが主人公が『ドイツ百科叢書』の手綱

訳注43 『最新文学にかんする書簡』のこと。訳注13参照。

訳注44 『一般文芸新聞』のこと。1785年からイェーナで刊行されていた。

を力強い手で再び握り直し、シェリングとの論争<sup>訳注45</sup>及びシュレーゲルとの論争<sup>訳注46</sup>をきっかけに露呈した〔新しい思想潮流との共〕依存関係のことでその新聞を責めた後すぐにこの新聞は消えてなくなってしまったのであった。この新聞に対して彼は、先に挙げた永遠の差し押さえ状態<sup>原注</sup>において、確かに寛大な同情の念を込めてはいるが、簡潔に、確定的かつ決然たる物言いで、包み隠さずこう言った。カントを称賛し、ラインホルトを称賛したこと、これはこの新聞の運命<sup>訳注47</sup>であった、と。そしていつもシュヴァーバハ体で、このことは否定できないだろう<sup>訳注48</sup>、と付け足していた。もちろんのこと、あの新聞はニコライがあの過失を暴いたこと、そして、彼がそのことをこれ以上言わないだろうということを希望し、かつ信じたのである。——<sup>訳注49</sup>

そう言えば当時は、フィヒテとかいう名の、1804年から音信不通となっている男が精力的に活動していたはずである。この男に対して、我らが主人公は同じ古典的文書において最高刑を宣告するいくつかの文章を、短く適切なかたちでこんこんと説いて含めるようにしたためている。

<sup>訳注45</sup> シェリングは自著『自然哲学についての諸考察』(*Ideen zu einer Philosophie der Natur*, Leibzig 1797.)に対する書評のことで、『一般文芸新聞』の編集者であるシュッツ (Christian Gottfried Schütz, 1747-1832) とフーフェラント (Gottlieb Hufeland, 1760-1817) と論争していた。Vgl. GA I/7, S. 389 Anm. 2.

<sup>訳注46</sup> 1796年の中盤から『一般文芸新聞』の批評家だったアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル (August Wilhelm Schlegel, 1767-1845) は、1799年に同新聞と袂を分かった。Vgl. GA I/7, S. 389 Anm. 3.

<sup>訳注47</sup> SW版では「運命」(Fatum)の代わりに「事実」(Factum)となっている。

<sup>訳注48</sup> Vgl. NADB, Bd. 56, S. 146. 「この新しい哲学〔アカデミー版編者による注釈：カント-ラインホルトの批判哲学〕が支持者を獲得すればするほど、この新しい哲学のこのような進展はこの新しい学術新聞にますます活気を与えていた。それと同様に、他面では、この哲学は『一般文芸新聞』が変わることなく喧伝し続けることによって、それがなかった場合よりも速いスピードで喝采を博していったのである。どちらも否定できない」。Vgl. GA I/7, S. 389 Anm. 12.

<sup>訳注49</sup> SW版には「——」がない。



その中身はと言うと<sup>訳注50</sup>，たとえば，このフィヒテなる男が，しかも最初から，しかも声を大にして言っていたのだが，あまたのカントの後継者たちのだれひとりとしてそもそも何の話がされているのか理解できなかったのだそうだが，——そう，わかりきっているとおり，彼，フィヒテを除いては，と我らが主人公はつけ加えている<sup>訳注51</sup>。（このフィヒテなる男にせめてごく当たり前の論理があれば当然わかりきったこととなるが，彼自身がそのことを理解できていると信じていなかったのだとすれば，一体全体どのようにして彼に残りの者はみな理解できていないなどという判断が下せたというのか。）こうした文章は処罰に値するようなでたらめではないかという疑惑をすべて排除するために，彼は「実際にフィヒテ自身の文言がそうになっている<sup>訳注52</sup>」ことを保証し，いたるところで本と頁を引用している。そして，1803年のフィヒテ撲滅戦を免れて残った若干の紙片において実際にも明らかにされているように，こうした引用は正しいものである。

我らが主人公は情け容赦のない敵対者であった。自分が印刷に回したものの[自分の著作]をニコライのフィルターを通してさらされるのを目にすることは，哀れなフィヒテをさぞやひどく意気消沈させたことだろう。

## 原注

私たちはしばしば言及してきた紹介書評<sup>訳注53</sup>を差し押さえ状と呼ぶ。

<sup>訳注50</sup> NADB, Bd. 56, S. 148 fg. Vgl. GA I/7, S. 389 Anm. 13.

<sup>訳注51</sup> NADB, Bd. 56, S. 148. 「フィヒテ教授殿は最初から声を大にして仰っていたのだが，「あまたのカントの後継者たちのだれひとりとしてそもそも何について語られているのか気づかなかった」というのだ。——そう，わかりきったことだが，彼を除いては！」 Vgl. GA I/7, S. 390 Anm. 14.

<sup>訳注52</sup> NADB, Bd. 56, S. 176 Anm. Vgl. GA I/7, S. 390 Anm. 15.

<sup>訳注53</sup> 本書の「序論」の訳注4（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第17号，2018年3月，107頁）で挙げた一連の書評のこと。Vgl. NADB, Bd. 56, S. 149-150. 「今や[すなわち，フィヒテのイェーナでの盛況な仕事りに伴って]『ドイツ百科叢書』ではけっして見られなかった状況が生じた。『一般文芸新聞』の場合は，この新聞に対して，一方的な，それゆえ確実に不当な影響力を思い上がって行使したがる主要な寄稿者とその他の学識者がみなお

なぜなら、もしかするとかなりの数の読者が読んですらいらないかも知れない注においてのみ次のことを白状しようと思うからである。すなわち、講じられた措置はすべてただたんに、シェリング、W・シュレーゲル、F・シュレーゲル、ティーク、フィヒテの各氏や、何という名前だったか、その他譴責を受けたものたちだけを対象にしたものではない。これらの措置は高次の目的のための手段にすぎず、彼らに対して編成配置された兵力はもっぱら本来の攻撃のポイントを隠すことだけに奉仕しているのである。その矛先は、恥を忍んで率直にぶちまけて言うのだが、本来は、イエーナの文芸新聞に対して向けられているのだ。

紹介書評で挙げられた諸著作、これは本来はシェリング及びA・W・シュレーゲルと『一般文芸新聞』との間で戦わされた論難書群を指すのだが、そうした諸著作の話ではなく、『ドイツ百科叢書』の永遠の創刊者のことを話題にして<sup>訳注54</sup>、彼がいかにしてまずはじめにあらゆる一面性や偏りを防ぐために（！）ドイツ全国全州から寄稿者を招くという理念を構想したのか、といったことが語られ始めるのである。<sup>訳注55</sup> 145 頁では確かに、『一般文芸新聞』の編集者たちもこの理念に従っていることは

互いのことを見知っていて動向を見つめているような、しかも適当な大きさの一箇所の場所にいたのである。[...] この『一般文芸新聞』の場合には、『ドイツ百科叢書』の創刊者が最初からとても用心してドイツ全国から寄稿者を招くことによって回避する努力をしてきた不愉快な状況があいにく成立してしまったのである。すなわち、今や『一般文芸新聞』の編集者たちにあっては、あまりにも近い結びつきのなかで自分たちと一緒にひとつの場所で暮らしている寄稿者たちやその友人たちとの対人関係がもたらす個々の事情によって、個人的な考慮事項が仕事に対してまがいなく好ましくない著しい影響力を持つことになり、中立的な読者にとって仕事に対する信頼が確実に低下することになったのである」。Vgl. GA I/7, S. 389 f. Anm. 4.

<sup>訳注54</sup> Vgl. NADB, Bd. 56, S. 144 fg.; GA I/7, S. 390 Anm. 5.

<sup>訳注55</sup> Vgl. NADB, Bd. 56, S. 144. 「『ドイツ百科叢書』は最初の書評誌であり、創刊者は、ドイツ全州から集まった大勢の学識者をこの叢書のもとに結集させ、けっして相互に個人的な結びつきを持つわけではない多くの学識者たちがこのように結集することによってリベラルな語調を取り入れ、その結果、判断が一面的に偏ったかたちで特定の国やある時ある場所で開催されていた一定の思考方法に結びつくことがあまりないようにし、そうした

否定されていない<sup>訳注56</sup>。しかしながら150頁にあるように、彼らの場合にはあいにく、「『ドイツ百科叢書』の創刊者が——最初から——とても用心して、まさしくドイツ全国全州から寄稿者を招くことによって回避するすべを心得ていた」不愉快な状況が成立してしまったのである。すなわち、持つことになったのだ、今や——と言うが、一体どんないきさつで今やなのか、一体全体今や『一般文芸新聞』の編集者たちは『ドイツ百科叢書』の永遠の創刊者の理念にもはや従わなくなってしまったというのか。まあ、こちらの知ったことではない。要するにだ、——「今や『一般文芸新聞』の編集者たちにあっては、近すぎる結びつきのなかで自分たちと一緒にひとつの場所で暮らしている寄稿者たちやその友人との対人関係がもたらす個々の事情によって、個人的な考慮事項が仕事に対してまちがいなく好ましくない著しい影響力を持つことになり、——中立的な読者にとって仕事に対する信頼が確かに低下することになったのである<sup>訳注57</sup>」。——紹介書評の全文に目を通せばいきさつがもっとはつきりするが、まさしく『一般文芸新聞』とその敵対者たちの手になるかの論難書群を通じて、——これらの論難書群は「当然ながら当事者双方どちらにとっても好ましいものではない」のであり、それゆえ、これらが「ドイツ叢書のいつもの慣行に逆らうかたちでもたらされている、別の学術誌で持ち上がっているような諍いを起こして継続していること<sup>訳注58</sup>」については無論のこと言及しておく必要があった——繰り返すが、かの論難書群を通じて、両シュレーゲルとシェリングが文芸新聞において影響力を持っていたこと、そして、この新聞が彼らに依存してい

---

判断に際して個人的な事情に配慮することができるだけないようにする、という理念を構想した」。Vgl. GA I/7, S. 390 Anm. 6.

<sup>訳注56</sup> Vgl. NADB, Bd. 56, S. 145. 「功績のある学識者たちの企画により、1785年にイエーナで似たような仕組みで運営されている『一般文芸新聞』が発刊された。似たような仕組みというのは、この新聞のもとにもドイツ全国全州から集まった寄稿者が結集しているからである」。Vgl. GA I/7, S. 391 Anm. 7.

<sup>訳注57</sup> 訳注52の引用文参照。Vgl. GA I/7, S. 391 Anm. 8.

<sup>訳注58</sup> Vgl. NADB, Bd. 56, S. 143. 「他に挙げると、別の学術新聞やその紹介書評新聞で起こっているような論争を紹介して批評することは、この叢書においては通例ではない」。Vgl. GA I/7, S. 391 Anm. 9.

たことが非常にきちんとしたかたちで明るみに出たいきさつがわかるのだ。そういうわけで感覚が鋭い読者なら自分で見極めることができることであるが、文芸新聞がどんなにお粗末なものであろうとも、この新聞が非常にお粗末なものどもに依存していたのであり、まさにそれゆえこうしたものどもとその友人たちの個人的な事柄をここで再び鮮明で研ぎ澄まされたかたちで記憶に呼び戻す必要があったのである。—— そんな文芸新聞であるが、こうしたことは抜きにして、この新聞がカントを称賛し、ラインホルトを称賛したことは否定できない。

これに対してどんな読者でも知りうるのは、ドイツ叢書が新しい哲学や最新の哲学といったものの前に昔から立ちはだかっていたことである。それにもかかわらずかつてこれらの哲学にかんする好意的な言葉がほんの一言この叢書に不作法な抜け道を使って紛れ込んでいたことがあったのだが、そうしたやり方は今でも発覚しており、とりわけニコライが再び実権を握ってからは、確実に失敗に終わっている<sup>訳注59</sup>。自画自

<sup>訳注59</sup> Vgl. NADB, Bd. 56, S. 160-161. 「したがって、『ドイツ百科叢書』は新しい哲学者たち、とりわけ最新の哲学者たちであるフィヒテに追従する哲学者たちの前にも、つねに見事に立ちはだかっていた。彼らにとって我慢ならなかったのは、自分たちが新しく考案したものだと誤解したものに対して根拠を挙げながら異論を唱える声、これらの最新の哲学者たちのことを重要だと言うことはおろか、唯一の真理だとまで称する連中のことを夢想に耽っているのだと頻繁に指摘する声が聞かれたことである。したがって彼らはなるほど、あらゆる機会を捕らえて『ドイツ百科叢書』のことを軽蔑しているかのように装っていたが、しかしながらこれに劣らず、この叢書を自分たちに好意的なものにするためにひそかに努力していたのである。彼らは何とフィヒテ氏の学派、あるいはステフェンス氏〔訳注：Henrik Steffens, 1773-1845：ノルウェー出身でデンマークとドイツで活動した自然哲学者、詩人〕のようにシュリング氏の学派を離れ〔て独り立ちし〕た寄稿者たちを推挙しようと試みたのだが、これはどうもうまくいかなかったので、哲学分野ではけっして書いたことのない『ドイツ百科叢書』の寄稿者（彼はもしかするとお人好しでその動機がわかっていなかったのかも知れない）を通じて、頼みもしないのに、彼らの意図にとって好都合な書評を送ってよそようと努めていた。まあ、ある記号〔訳注：郵便の収納印の記号か？〕から十中八九の高い確率ではっきりわかるのだが、イエーナから届いた書評なのである。

賛をすべてはねつける憤り深さにとってふさわしいことは、ボーン<sup>訳注60</sup> 392  
のところで発行された新叢書の最終号において匿名で、再び時代遅れに

『ドイツ百科叢書』の当時の経営陣〔アカデミー版編者による注釈：ボーン（Karl Ernst Bohn, 1749-1827）。併せて訳注 59 参照〕はこのような不作法な抜け道を使うやり方に対して同じくらい十分に注意していたわけではなかったもので、こうした手口は、同じような 2, 3 の書評が掲載されてしまったて何となく違和感を呼び起こした後ではじめて発覚する始末であった。たとえば、唯一『新ドイツ百科叢書』第 18 巻、355 頁にのみ掲載されている、そのような、ひそかに持ち込まれた書評を参照のこと。これはフィヒテの全知識学の綱要という、聴講者のためだけに印刷された仮綴じの冊子（Broschüre）にかんする書評である。『ドイツ百科叢書』に頼みもしないのに紛れ込んでいたフィヒテ派の人物が非常に抜け目なく書き起こしているさまをお読みいただきたい。「全思弁哲学にとってきわめて重要なこの著作が卓越していることについては、その内容をより精確に紹介して批評することがその証拠として役に立つ」。そして後にはつまらない内容が続くだけで、ごくわずかな注すらない。細かいことにネチネチこだわって屁理屈をこねているだけで、何の根拠もない、好き勝手な文章が長々と展開されており、まるっきり最新の哲学者たちの口調でこうつけ加えられている。「こうした探究はすべて相互にしっかりと基礎づけられている。しかしながら、このような大きな試みの全体については、もっぱら、熱望されている完成後に判断されねばならない」。このような抜け道を使うやり方はなるほど、発覚するとすぐに行く手を遮られた。しかしながら最新の哲学は、それでもやはり少なくとも、みずからの目的を一度は達成したのである。つまり、この哲学はだれにも悟られずに自画自賛できたわけだし、しかも『ドイツ百科叢書』の誌上で——この叢書にかんしては、新しいものをただたんに新しいからという理由で喧伝するのが当たり前のことだというふうには、ふだんは思われていなかったのだ——、知識学について、重要性を持つ大きな試みであり、その完成が熱望されよう、と紹介してもらえたのである」。ニコライが上で指しているのは次の書評。Rezension: „Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre, als Handschrift für seine Zuhörer, von Johann Gottlieb Fichte. Leibzig, bey Gabler. 1794.“, in NADB, Bd. 18, St. 2, Kiel 1795, S. 355-364. 「Mm.」の署名あり。『新ドイツ百科叢書』において普段「Mm.」と署名していた書評者はベティガー（Karl August Böttiger, 1760-1835：ドイツの文献学者、考古学者）。Vgl. GA I/7, S. 391 f. Anm. 10.

<sup>訳注60</sup> カール・エルンスト・ボーン（Karl Ernst Bohn, 1749-1827）：ハンプルク  
の出版業者。ニコライが再び引き継ぐまで、『新ドイツ百科叢書』の発行者  
だった。Vgl. GA I/7, S. 392 Anm. 11.

なってしまったこの叢書の最初の巻がニコライのところで刊行されるとともに、『一般文芸新聞』に対する読者の信頼がシェリングとの論争を通じて今まさに低下している最中であるこの時に、こうしたいきさつについてきちんと説明し、そうすることによって、この新聞が読者の信頼を携えて今やどこへ向けて舵を切るべきなのか読者に知ってもらうことである。

したがってあの紹介書評は、その真の規定に従って言えば、旧版の叢書に対する昔からの信頼の差し押さえ状である。こうした信頼の低下について昔の編集者はやはり若干の手がかりを掴んでいるにちがいないのだ。

切に願わくは、感覚が鋭く見事に的を射るシュッツ宮廷顧問官殿があの紹介書評のこのような本当のねらいに気づくなんてことではなくて、これはもっぱら両シュレーゲル、シェリング、フィヒテといった奴儕を散々ばら鞭で打っているだけだとまっすぐ鵜呑みにしていただきたい。そしてまた、この注がけっして彼の目にとまりませんことを。なぜなら、さもないと——、私たちはニコライ氏の立場になど立ちたくないのだ。さらには、もしかすると、私たちがかの偉大な文学機関の名誉と隆盛に對して現を抜かすことは、私たち自身にとってもためにならないのではなかろうか。

(第6章以降は次号以降に続く)